

結婚なんてお断りです！

～強引御曹司のとろあま溺愛包囲網～

「お見合いなんてしないから！」

怒りのままに叫んだ瀬村花純は、運転席に座る母、明美をギロリと睨む。ハンドルを握る明美は、悪びれたふうもなくケラケラと笑うばかりだ。それがまた腹立たしい！

母が駅まで送ってくれると言いだした時点で、疑うべきだった。

いやいや、おかしいとは思っていた。

明美がめずらしくぼつちりメイクにおしゃれをしているから、不思議には思ったのだ。

せめて、そこで気付いていれば。

車は駅前へ続く国道を逸れて、高級店の並ぶエリアへと向かっていく。

「いいじゃない。お見合いって言っても、そんなに堅苦しいものじゃないんだって。ほら、皆でお食事会？ そんな感じ。ちょっと会うだけよ〜」

「絶対会わないから！」

「恵子ちゃんの会社の取引先の御曹司なんだって。次男坊。すごいイケメンらしいわよ〜」

明美の妹である夏川恵子は、小さいながらも会社を経営している。デザイン関係だと聞いている

が、具体的にどんな仕事なのか花純は知らない。だから、御曹司がどの程度の御曹司なのかも想像がつかなかった。

ただ、御曹司に自分がつりあわないということだけは、はっきりしている。

それに、別の日ならまだしも今日はダメだ。大事な予定がある。

「絶対会わない。車降りるから止めて!」

「ダメダメ。だってお見合いは今日なんだから。今更お断りできないでしょ? 相手にも失礼よ」

「わたしの了解もなしに引き受けるほうが悪いんですよ!」

「だって花純、事前に言ったら絶対『うん』なんて言わないじゃない。ホテルの高級ランチよ? 皆でお食事するだけだから。食べるだけ、ね? 恵子ちゃんにお年玉もらったじゃないの、恩返しだと思つて。会うだけ、ね?」

今ほど、明美の間延びした話し方を腹立たしく思つたことはない。

お年玉なんて、いったい何年前の話をしているのだろう。

そんな昔のことまで持ち出して!

「恵子ちゃんも、お見合い相手が見つからなくて困つてたんだつて。取引先の社長夫人に『いい子はいないか』って声を掛けられたら、そりゃね、恵子ちゃんが必死になる気持ち、花純だつてわかるでしょ? 助け合いじゃない」

取引先の社長夫人の頼みなら、恵子が必死になるのもわかる。

わかつてしまう……「助け合い」なんて言葉に乗せられそうになる自分がまた憎らしい。

「……叔母さんの事情は知らないけど、お母さんはホテルのランチ食べたいだけじゃないの!」

「それもあゝ」

鼻歌でも歌い出しそうな明美がハンドルを切り、車はホテルの駐車場に吸い込まれていった。

花純はこれみよがしなため息をついて、助手席のシートに後頭部を思いきり押し当てて。

(今日は reach^{リーチ}さんに会う約束なのに……!)

彼との待ち合わせは、午後三時。

場所は、駅ビル前にある天使の銅像前。

腕時計を確認すると、短針と長針が、ちょうど十二の文字の上で重なるうとしていた。

約束より早めに家を出て、少し周辺をぶらぶらして気持ちを落ち着かせようと思つていたのに。

お見合いの状況次第では、約束に間に合うかどうかともわからない。

「大丈夫、わかつてるわよ。今日はデートなんでしょ?」

「デ、デートじゃないから……!」

「嘘だ、そんなにおしゃれして!」

そうだ、花純は今日おしゃれしている。ここ数年で、一番服装に気を遣つた。

ミモレ丈のフレアスカートは甘すぎないグリーンで、オフホワイトの春ニットで地味顔が明るく見えるよう調整した。夜の冷え込みに備えてカーディガンを肩にかけ、足元は男性よりも背が高くなつて自尊心を傷付けないように配慮した五センチヒールのパンプスだ。この日のために、バッグ

だって新調した。

クセのきつい髪はサイドでまとめて、パーマ風に見えるようにアレンジした。うまくいかなくて何度もやり直して、上げっぱなしの腕がだるくなったくらいである。

雑誌とネットの力を借り、枯れかけの女子力を総動員して、地味な自分なりに頑張った。そう、頑張った。それは全部、彼のためだ。

さすがに年齢も顔も本名すら知らない相手に、運命を感じてどっぶり恋をしているわけではないけれど、毎日の彼とのやりとりが自分にとって大事な心の栄養で、そんな彼を好きに……なりかけている。

彼から「会いたい」と言われたときには、年甲斐もなくドキドキして眠れなくなった。

その人に、今日会うのだ。

ハンドルネームは reach731。

たぶん男性、たぶん都内在住。

たぶん、素敵な人。

彼のために、おしやれをした。

なにがいけない。

「このおしやれは、お見合いのためじゃないんだから……！」

凶星をさされて顔を熱くした花純に、駐車場の一角に車を停めた明美が笑いかける。

「今日の花純すごく可愛いわよ。似合ってる似合ってる。大丈夫、ランチが終わったら、ちゃ

んと約束の場所まで送ってあげるから。だから、ね？ お見合い、行ってくれるでしょ？」

二十五歳にもなって母親にきっぱりノーと言えない性格は、花純自身も問題だと思っている。

けれど、叔母の立場や、お見合いのために高級ホテルにやって来る御曹司に無駄足を踏ませるのは悪い気がして、花純は投げやりに頷いてしまうのだった。



「こちらが、姪めいの瀬村花純です」

「はじめまして」

叔母の恵子に紹介されて、花純はゆっくりと頭を下げた。テーブルを挟んで向かい合うのは、いかにもなギリギリしたお金持ちではなく、優しげで品のいいご婦人だった。

だけど、そのマダムの隣には——誰もいない。

「まあ、可愛らしいお嬢さんだこと。ごめんなさいね、本人が遅れてしまって。息子も、もうすぐ着くと思います。私、母の泰子やすこです。どうぞ、お座りになってください」

「失礼します」

面接のような緊張感だ。

泰子のやわらかな笑顔に、花純はぎこちない作り笑いで応じることしかできない。

高級ホテルのレストランの雰囲気と、周囲からの視線にすっかりのまわっていた。見られている。

他のテーブルから、チラチラと視線を感じる。

お食事会みたいなものだと思美は言ったが、マダム三人に囲まれた花純は、やっぱり少し浮いている。周囲にはいったいどう見えているのだろうか？ 哀れな生贄？ 歳の差女子会……には、見えそうにない。

花純の左側に座る恵子が、思い出したように口を開いた。

「花純は、今年二十六歳になるんですよ」

「あら、だったらうちの息子のほうが少し上ね。あの子は今年三十になるんだけど、花純さんは、四歳の歳の差は、平気？」

「は、はい……」

愛想笑いで、いったいどこまで乗り切れるだろう。

帰りたい。帰りたい、今すぐに。

「夏川さんにお願ひしてみて、本当によかったわあ。こんな素敵なお嬢さんを連れてきてくれて。それで、花純さんは、今はお勤めしてらっしゃるのかしら？」

「はい、服飾系の会社で、営業事務をしています」

「あら、そうなの。うまくお話がまとまったら、うちの会社に来てもらえそうね」

「まあまあ、館入商事さんからの引き抜きなんて大それたお話を」

花純の耳には、泰子と恵子の「ほほほほ」というセレブな笑い声など、まるで入ってこない。

「……館入……？」

館入商事といえば、大企業だ。

はじめは呉服屋だったというが、時代の変化に合わせてブランドを多数展開し、幅広い客層から支持を得た結果、今や日本だけでなく海外にも店舗を構えている。近年はウェディング関連の事業が大化けして、業績は不況のアパレル業界のなかでは異例の右肩上がりだ。

（叔母さんの会社、そんなオバケ企業と取引があるの？ っていうか、わたしが今からお見合いです人って、館入商事の御曹司……!?!）

急に口のなかカラカラに渴いてきた。

（そんな御曹司とお見合いに、父親が係長止まりのド庶民の娘連れて来てどうするの!! つりあうわけないじゃん!）

グラスの水を、一気に半分ほど胃に流し込んでみる。

それでも動悸が止まらず体が熱い。グラスのなかでぐるぐる回る氷を貪りたい衝動に駆られた。ガリガリ音をたてて、氷と一緒にこの緊張を噛み砕いてしまいたい……

「ふふふ、お腹が空いてしまったわよね。先に、お食事をはじめましょう」

大企業の社長夫人の提案で、すぐに華やかな懐石料理が運ばれてくる。

こんなときでなければ、スマホで写真を撮っておきたいくらい可愛い盛り付けだ。

お刺身は花のようにくるんと巻いてあり、てんぷらは衣ひかえめでエビの赤が透けている。たけのこの炊き込みご飯に、花型の生麩が浮いたお吸い物。うるうるの胡麻豆腐も、焼物も、煮物も、どれもこれもキラキラしている。

「美味しそう」

ほぼ同時に、年齢も立場も異なる四人の女が口を開いた。

料理の味や、彩り豊かな盛り付けについての感想を言い合いながら、食事は和やかに進んだ。泰子が気さくに、「私は今でいうと、『メシマズ』なのよ」と自らの失敗談を披露してくれたおかげで、花純の緊張もいくらかほぐれてランチを楽しむことができた。

そして食事が終わり、四人の前に食後のコーヒーが運ばれた頃だった。

入り口から、背の高い男の人がフロアスタッフに案内されて入ってくるのが視界の端に映った。きりっとした美形だ。

黒髪と切れ長の目が涼しげで、ちよつと冷たそうな雰囲気。しかし黒のパンツに白のカットソー、黒のジャケットを合わせた装いは、カッチリしすぎず、落ち着きがあつてかつこい。

(モデルさんみたい……)

雑誌の撮影中です、と言われたら、信じてしまいたい。

クールな印象と、どことなく漂う上品さに目が離せなくなる。気付けば、ぼーっと彼を視線で追ってしまっていた。

その彼が、なぜか花純たちのテーブルの前で立ち止まった。

「遅れて申し訳ありません」

「あらあら、どうして今日はスーツじゃないの。そんな格好で、失礼だわ」

「今日は予定があるので。それで、どなたが？」

彼の視線は、テーブルの片側に並ぶ、恵子、花純、明美の三人を順番に辿ったあと、花純の上で止まった。

イケメンと視線が交差して、思わずドキリとしてしまう。

「あらいやだわあ！ 私たちみたいなオバサンがお見合い相手なわけありませんよ。お上手なんだから。こちらが、ご紹介したい瀬村花純です」

(イケメン御曹司!!)

目の前にいる彼こそが、お見合い相手のようだ。緊張で、背筋がピンと伸びる。

彼は涼しげな表情を崩さず、おもむろにジャケットの内側へ手をやった。

「はじめまして。館人です」

レザーの名刺ケースから出した名刺を差し出され、慌てて立ち上がり両手で受け取る。

館入商事のロゴ入りの名刺には、名前の他に、社用のメールアドレスと携帯番号が書いてある。

名前は『館人利一』。フリガナはない。

(たていり、としかずさん、かな?)

「ありがとうございます。瀬村花純です。すみません、今日は名刺を持ってなくて……」

「ああ、必要ありません」

チクリと棘を感じる。そういえば、この御曹司は登場してから愛想笑いも浮かべていない。遅れてきたわりに、随分な態度ではないだろうか。

(相手が叔母さんの取引先の人だから言わないけど……ちよつと感じ悪いなあ……)

微妙な空気が流れはじめた場をとりなすように、泰子が笑いかけた。

「あなたが遅いから、お食事は終わってしまったのよ。なにか飲む？」

「いえ、結構。このあと予定があるので、手短に済ませたいのですが」

「それでしたら、さっそく若い方だけでお話ししていただいてはどうでしょう？」

恵子は提案し、泰子と明美を店外へと促した。

「そうですね。花純さんと、ちゃんとお話ししてね」

息子に釘を刺した泰子のあとを、もはや空気と化した明美もついていく。

花純は「ノー」の一声をあげる隙もなく、館人商事の御曹司と取り残されてしまった。

どうしよう。チラッと御曹司を見上げると、彼はため息をつきながら腰を下ろし、渋々といった

様子で「コーヒーを」と注文を済ませた。

(なんだろう……困ってる?)

イケメン御曹司の眉はぎゅっと中央に寄っているが、怒っている様子ではない。

もっと、困惑に近いなにかが彼の秀麗な顔には浮かんでいた。

(いや、でも、こっちだって困ってるんだけど……)

彼がこのお見合いに乗り気でない様子は、ひしひしと伝わってくる。

花純とて、強引に連れてこられただけで乗り気でないのは同じだけれど、ここまであからさまな

態度を取られるとさすがに少し傷付く。

(なんか、わたしがイマイチだから乗り気じゃないみたいで、ちょっとへこむ……)

相手がずば抜けたイケメンだけに、自分の地味な容姿が気になって仕方ない。

それにどうやら自分は今日、異性からの反応に過敏になっていているらしい。

これから会う『彼』によく思われたいなんて自分の下心に気付いてしまい、気まずさばかりか余計な恥ずかしさまで込み上げてくる。

「瀬村、花純さん……でしたね」

「はいっ」

「あいにくですが、あなたと結婚する気はありません」

「……はい？」

「お見合いに来るのは、皆同じだ。館人の家名と、金が目当ての女性。そういう人と、結婚する気はないんです。あなたもどうせ、楽しんで贅沢な暮らしがしたいだけの専業主婦志望というやつだらう？」

彼の口ぶりには、あからさまな侮蔑が滲んでいた。

お見合いにやってきた女の人たちを十把一絡げにして「金目当て」と決めつけて、馬鹿にしているのだ。しかもそれを隠す気もない。

反発心が膨れあがった。これまで彼がどんな人たちとお見合いをしてきたのかは知らないが、少なくとも花純はそんなつもりでここに来たわけではない。

「いいえ、わたしはっ」

「取り繕わなくても、今の状況が物語っている。遅れてきた俺を一時間も待っている時点で、館人

との結婚にしがみ付いているのは明らかだ」

「しがみついてなんて！」

「随分気合いを入れてきておいて、しがみついていないとでも？ その服、おろしたてだろう。靴も、バッグも。見合いのために新調したんだろう？ 気付かれないと思っただのか」

「——っ、これはっ……！」

「館入に相応しい令嬢を意識したんだろうが、成功とは言えないな。あまりにも地味だ」
カアツと花純の顔が熱くなった。

心臓にガラス片が突き刺さったみたいに、体の奥がズキズキする。

この人は、どうして初対面でこんなひどいことを言うのだろう。

地味だなんて、自分でもわかっている。

だけど、今日だけはそんなふうに言われたくなかった。

だってこれから、大切な人と会うのだ。そのために調べて、悩んで、時間をかけた。なのに。

あまりにも地味——その一言で、全部、台無し。

「このお見合いは、こちらから断りを入れておくから、そのつもりで」

なんだ、この男は。

人の話は一切聞かず、自分の偏見を押し付けて話を終わらせようとするなんて。

花純が地味で気に入らなかつたとしても、こちらの話を聞いてくれれば、『お互い、お見合いなんて押し付けられて大変でしたね』と和やかに終わることもできたはずだ。

お見合いに遅刻してくるような失礼な男を待っていたのは、叔母の顔をたてたから。

泰子の話が楽しかったから。料理が美味しかったから。

この男のためじゃない！

これから大事な予定があるというのに、人の心を土足で踏み荒らしておいて、無傷で帰れると思っただけ大間違いだ！

「……こちらからも、お断りしておきます」

「なんだって？」

いつもの花純なら、絶対にこんなふうには言い返したりはしない。

だけど彼は、よりにもよって今日、特別仕様の花純にケチをつけたのだ。

このまま黙って引き下がってやるものか。

「わたしだって、あなたとは結婚したくないと言っているんです。あなたのお母様はとても優しく、楽しくて、素敵な方でした。ご息がこんな人だなんて、信じられない」

こんな傲慢で冷たい男、いくらお金持ちでも願ひ下げだ。

「わたしにだって、結婚相手を選ぶ権利くらいあります。あなたみたいな人とは、たとえ一生安泰あんたいの生活ができて結婚したくありません。それに！ あなたが遅れた時間だけど、一時間じゃなくて、一時間十五分ですから！」

彼はやや目を瞠みはったが、なにを思ったのか「ハッ」と鼻で笑った。

淡々としていたときより花純を見る目は感情的になっている。しかし、その感情はプラスへ転じ

ることなくどこまでもマイナスのまま突き抜けていったらしい。

「たかが十五分で目くじらを立てるほど、結婚を焦っているわけか」

「お言葉ですけど、十五分の遅刻といえは、普通の会社なら大目玉ですよ。ああ、もしかして、遅刻を注意されたことなんてなかったのかな。温室育ちで結構なことですね」

自分でもびっくりするほど、切れ味鋭い言葉だった。

それを受けて、目の前の御曹司は不敵に笑みを深めていく。しかし、その目は一切笑っていない。
「なるほど。いつもの見合い相手より、多少見所はあるらしい」

——『いつもの見合い相手より』『多少』『見所はあるらしい』？

この、とことん人を見下す心理は、どこからくるのだろう。

(お金持ちって、皆こうなの？ 信じられない！)

性格が歪ゆがんでいるし、付き合いきれない。

今すぐ、このいけ好かない御曹司のいない空間に行きたかった。

バッグを掴つかんで椅子から腰を浮かせた花純に、彼は最後の問いだというふうに声をかける。

「君は、どうしてここへ来たんだ。条件のいい男を捕まえて、悠々自適ゆうゆうじてきの暮らしをしたいと思っただんじやないのか？」

ため息を禁じ得ない。

きつと、彼の頭のなかには、夫婦共働きでも幸せだと感じる女なんて存在しないのだろう。

女は、与えられるだけの無力な生き物だとも思っているのかもしれない。

「男に頼るだけが女じゃないって、覚えておいたほうがいいですよ」

さすがに面食らったのか、彼は呆然としていた。

「ああそうだ。お食事、美味おいしかったです。ごちそうさまでした！」

突きつけたお札を彼が受け止めきれないうちに、スカートをひらめかせてレストランを出た。

お腹の奥ではまだいらだちの炎がくすぶっていたけれど、彼の顔を見るに、自分がなかなかいいカウンターパンチをお見舞いしてやったことは間違いないはずだった。

叔母の恵子には申し訳ないが、御曹司をやり込めた気分は、悪くない。

2

——天使の銅像前。

腕時計を確認すると、時刻は午後二時五十七分。

ギリギリの到着になってしまった。

ホテルを出てから、約束の駅前まで明美に送ってもらった花純は、駅ビルのショッブに飛び込んでワンピースを購入した。駅ビルのトイレで新調したワンピースに着替え、化粧室でメイクをなおし、脱いだ服はショッブパーに入れてコインロッカーに放り込んだ。

白地に小花柄のワンピースは、いかにもデート向きで少し恥はずかしいけれど、あのままの服でい

たくなかった。

あんな最低御曹司の言葉、気にする必要はないとわかっている。でも、どうしても気になってしまったのだ。

十人並みの容姿は今さらどうしようもないのだから、せめて、服だけでも（あんな御曹司にどう思われようと気にしないけど、reachさんには……）

——顔も名前も知らない相手。

けれど、失礼極まりない男に『地味だ』と言われたことを気にして、新しい服を買ってしまうくらいには、reach731からの印象をよくしたいなんて思っている。

SNSで知り合った異性に恋するなんて、あり得ないと自分に言い聞かせてきたけれど。

気合いを入れたおしゃれ。新調した服。彼がどんな人が想像して、なかなか寝付けなかった昨夜。これが恋じゃなかったらなんだろう？

プワァッと顔が熱くなる。

（ダメ、考えない！ 余計緊張しちゃう！）

花純は前髪を指先で整えながら、うるさい自分の心臓から意識を逸らすように周囲を見回す。

天使の銅像周辺は、人だらけだ。

（ここで待ち合わせする人、こんなに多いんだ）

目立つ場所だから、待ち合わせスポットとしても人気なのだろう。

誰もがスマホを片手に、時間を潰したり連絡を取ったりしながら相手を待っている。

誰がreach731なのか、見当もつかない。花純もバッグからスマホを取り出した。

SNSアプリの、オレンジ色のアイコンをタップする。

花純のアカウント『jimiko』のホーム画面に、非公開の個人宛メッセージの新着を知らせる赤い

バッジがついていた。

（reachさんだ……）

午後二時五十分に、reach731からメッセージが届いていた。

『到着しました。着いたら、連絡ください』

慌てて返事を送る。

『お待ちせしました。今、銅像の正面にいます』

『向かいます。黒のジャケットを着ています』

すぐに返事がきて、スマホを握る手が汗ばむ。けれど、緊張に吞まれている場合ではない。

銅像の正面には、花純を含めて十人ほどの女の人がいる。見つけてもらうためには、こちらもなにか目印になる特徴を知らせなければ。

『わかりました。こちらは——』

入力していた花純の手が止まった。

銅像の裏手から、ついさつき会ったばかりの御曹司が現れたのだ。

間違いない。館入りだ。

（うわっマズイ!!）

絶対会いたくない相手が、どうしてここに！

隠れなければ。顔を合わせるのも嫌だ。

それに、彼の一言を気にして着替えたなんて知られたくない。

慌てて人の波に紛れ、彼がやってきたのとは反対側から銅像の裏手に回り込んだ。

(なんであの人がここにいるの!? もうっ……いや、それより reach さんに返事！)

『すみません、銅像の裏手に移動しちゃいました。ベージュのバッグを持っています』

『了解です』

『お手数をおかけします。待ってますね』

館入利一と鉢合わせるのではないかという緊張と、 reach731 とこれから会うというドキドキが混ざり合って、鼓動がどんどん加速していく。

もう一度前髪をなおして、銅像の向こうからやってくる人に意識を向ける。

約束の彼は、黒のジャケット。しかし花純の側にやってくるのは開襟シャツ、Tシャツ……黒のジャケットは定番の服なのに、なかなかいない。男の人は四月はじめのこの時期、結構ラフだ。

じっと銅像の周辺を注視していた花純は、「ひっ」と息を吸い込んだ。

またしても、あの御曹司が姿を見せたのだ。

(もう、なんでこっちに来るの……!!)

逃げ出したい！

だが、銅像の正面から裏手に移動したばかり。また銅像の正面に移動すれば、 reach731 にどん

な印象を与えてしまうか容易に想像がつく。

きっと、落ち着きのない、ちよっとおかしな女だと思われる。間違いない。絶対そうなる。

あんな失礼な御曹司のせいだ、 reach731 に悪印象を持たれるなんて悔しすぎる！

(なんでわたしがアイツから逃げ回らないといけないの！ 知らない。そう、こっちが避ける必要なんてない。あんな傲慢な御曹司、無視しとけばいいだけ)

さっきあれだけやりあつたのだから、向こうだつてわざわざ声なんてかけてこないだろう。

花純はできるだけ顔をあげないようにしながら、祈るような思いでスマホ画面を見つめた。

早く、 reach731 と合流してこの場を離れたい。

『今、銅像の裏手にいます』

はっとして、花純は素早く視線を周囲に走らせる。

reach731 の特徴は、黒のジャケット。

軽装の若者が多く、ジャケットを着ているのは一人だった。

館入利一だ。

目が合った。

「……………」

首がもげそうな勢いで目を逸らす。

(なんで被っちゃうかな……………!)

待ち合わせ場所、そして黒のジャケットまで被るなんて。

御曹司なら御曹司らしく、こんなカジュアルな場所ではなくて、高級ホテルあたりで待ち合わせしてほしいものだ。

それに、館入利一を一目で見つけてしまおう自分にも腹が立つ。彼が目立つからいけないのだ。背が高く、すらりとしていて、顔もいい。奇抜な服装でもないのに存在感がある。認めざるをえない、彼はとびきり見た目がいい。

それがまた、どうしようもなく悔しいけれど。

スマホに、reach731からのメッセージが表示される。

『ベージュのバッグ以外に、なにか特徴はありませんか？』

彼も花純を探してくれているようだ。さつき確認した範囲に黒のジャケットは館入利一しかいなかったけれど、きつと近くにいるのだろう。一刻も早く、見つけだしてもらわなければ。

『白地に、小さな花柄のワンピースです。すぐにわかるとと思います』

はじめから服装を伝えておけばよかった。

ざっと見たなかでは、同じような白のワンピースを着ている女の人はいない。

返信すると、すぐにこちらへ向かってくる靴音を感じた。

(来たあ……！)

俯いた視界に映る靴はまだ新しく、品がいい。

すらっとした足を包む、黒のパンツ。

画面越しにしか感じられなかったreach731の存在が、いよいよ現実になっていく。

どんな人だろう？ 顔は？ 歳は？ オジサンだったら、見た目がダメなタイプだったら——いや、人間は見た目じゃない。長く続いたSNSのやり取りで、彼が大人で優しい人なのはよくわかってる。外見やステータスなんて関係ない。きつと今日は楽しい日になる——

花純は、じりじりと顔をあげた。

「……………っ!!」

そこにいるのは、険しい顔をした館入利一。

傲慢な御曹司が、花純の目の前に立っている。

「いったいなぜ？ まさか、さつきのリベンジに来た？」

「……jimiko さん。」

「……………?」

少し低い声が、戸惑いを滲ませながら花純のハンドルネームを口にする。

嘘、まさか。どうしよう。

頭のなかが真っ白になる。口の端がピクピク痙攣していた。

そんな馬鹿な。だって彼は。

「……………館入、としかず、さん、ですよね……?」

「いや、利一です」

りいち……?」

目の前の御曹司は、手に持っていたスマホの画面を花純に見せる。

表示されているのは、さつきまで花純とやりとりしていたSNSのメッセージ画面。

アカウント名は、reach731……

「……………reach……なな、ちゃん、いち、さん……?」

「……はい。館入利一、七月三十一日生まれ」

「……………」

名前、としかずじゃなかった……!



(あ、この人また、いいね、押ししてくれてる。reach731ちゃん……)

頻繁^{ひんぱん}に映画の感想を投稿する『jinko』のフォロワー数は三百程度だ。

飛びぬけて多いわけでも、泣けるほど少ないわけでもない。

映画の感想に、毎回反応をくれるアクティブなフォロワーもいれば、『その映画ちよつと気に入る』の付箋^{ふせん}がわりに、「いいね」を押ししてくれる人もいる。

インターネット上には、花純より映画好きの人間がごまんといる。

共通の趣味を持つ人々は、会話せずとも自然と繋がりあうもので、そのなかにreach731がいた。彼は公式情報を中心にチェックしていて、基本的に発言はしない。面白おかしく作品を辛口で評価するレビューとは関わらない姿勢は、繊細な人柄^{うづか}を窺^{うかが}わせた。

(この人、どんな人なんだろう?)

reach731の存在を認識して半年ほどたった頃、彼がめずらしく映画の感想を投稿した。

『フォロワーさんの感想で気になって観に行った。すごくよかった』

一緒にアップされた写真は、恋愛映画のチケットの半券。

数日前に、花純が『好きな映画ナンバーワンかも!』と絶賛した映画だった。

日に二度しか上映されないような、マイナーかつ暗くて切ない大人のラブムービー。万人受けする内容ではないので感想を投稿している人も多くない。

もしかして……

(そのフォロワーって、わたし?)

いやいや、考えすぎ。

そう思いつつも、彼を意識するようになった。

彼の好きな映画のジャンルは、ファイアものやハードなミリタリー系を除くアクションか、サスペンス。SNSのアイコンは空か海かわからない青い写真なので年齢も性別も顔も知らないけれど、reach731からの「いいね」が増えるたびに、少しずつ距離が縮まっていくような気がした。

『フォロワーさんが絶賛してたから観てみた。すごくよかった』

(あっ! これ、絶対わたしだ!)

自意識過剰。そんな言葉が頭を過ぎったけれど、気付けば花純から声をかけていた。

いつしか、彼との毎日のやり取りが楽しみになっていった。

短文からはじまったものが、どんどん長文になっていき、毎日おはようとおやすみを言い合うようになった頃には、たぶん、花純は彼を好きになっていったのだと思う。

ときどき同じ映画館を利用していることが判明し、彼から『今度、一緒に観に行きませんか』と誘われた。『jimikoさんに会いた〜』の一文に本気でドキドキして、枕に顔を埋めて、年甲斐もなくキヤーカー叫んでしまった。

返事を出すには勇気がいった。ネットで知り合った人と実際に会うなんて。同性ならまだしも、たぶん異性だ。なにかあつたらどうしよう。変な人だったら？

そんなふうに警戒もした。会って、今の関係が壊れてしまうのも怖かった。

だけど、会いたかった。

会いたいと言ってくれた彼に、会ってみたかった。

一目惚れや憧れではなく、もっと、ピュアな恋だった。

そう、恋だったのに。

(それなのに……)

目の前に現れたのは、繊細で大人な reach731 のイメージとは対極にいるような、失礼極まりない御曹司。

「君が……jimikoさん……」

険しい顔の館入利一。

モヤモヤする。自分のなかで、reach731 と性悪な御曹司が重ならない。重なってほしくない。

「着替えたのか……」

「っ——！」

お見合いの場での彼の言葉を気にしていることを指摘されたみたいで、悔しくて顔が熱くなった。これ以上ここにいたくない。この人と、これ以上関わりたくない。

「し、失礼します……っ！」

「待ってくれ」

彼の隣をすり抜けようとして、大きな手に捕まった。剥き出しの素肌に、彼の手が触れる。

「やだっ、触らないでよ！」

「君が逃げようとするからだ」

「ちよっと、放してっ！」

「放さない。どうして逃げるんだ。やっ与会えたのに——」

「はあ!? やっ与会えた!？」

よくもそんなことが言える!

「自分がどんな態度で、なにを言ったか忘れたの!? さんざん馬鹿にしておいて! どうせわたしは、あなたにとって話を聞く価値もないような地味な女なんだから、もういいでしょ!」

言ってから後悔した。

なんて卑屈な言葉なんだろう。『どうせわたしは』『あなたにとっては話を聞く価値もない』『地味な女』——それはブーメランのごとく花純の心に突き刺さる。

だけど、彼に、自分はその程度の人間だと痛感させられるような扱いを受けた。傲慢で性悪な御曹司に気に入ってもらいたいなんて、これっぽっちも思っていない。

でも、reach731に対しては違っ。

(なんで、この人なの……)

お見合い相手に偏見を押し付けて、冷たくあしらう御曹司が、彼だったなんて。

花純を『地味』と評した館入利一が reach731 なら、自分は、ほのかな想いを寄せていた相手に気に入ってもらえなかったことになる。

(ほんと、馬鹿だ……わたし、なに期待してたんだろう……)

reach731 からの返事に「喜一憂していた日々が、粉々に碎けて崩れていく。

胸の中の大切な部分に、ぽっかりと穴が空いたようだった。

「……さつきは、悪かった」

カッとなって顔をあげたけれど、後悔を浮かべた彼の切実な瞳に、喉の奥で声がつかえた。

遠巻きに、クスクスと笑い声が聞こえてきた。周囲からの冷ややかな眼差しを感じると、自然と視線はアスファルトに向いてしまう。

混雑した待ち合わせスポットで口論になっている男女は、どれほど滑稽だろう。彼がしおらしく引き留めてくるせいで、周囲の人たちには花純がへそを曲げて彼を振り回しているように見えているのかもしれない。

恥ずかしくて、顔もあげられない。

(みつともない……二十五にもなって、こんなふうに騒いじゃって……)

ここから立ち去りたい。けれど、体は鉛のように重く、足はピクリとも動かない。

この気持ちは、どう片付けたらいいのだろう？

信じられないくらい長文の映画話に付き合ってくれた。オススメの映画を教え合うときだって、彼は Jimiko の好みを的確に捉えてくれて。いつまでも敬語のメッセージは、なんだか紳士的な印象で。深夜の返信からは彼の多忙な日常が窺えたのに、仕事の愚痴ひとつこぼさない。そういうところも、真面目な気質の表れだと思っていた。

穏やかで、優しい人だと信じて疑わなかったのに。

(わたし、reachさんのこと、なにもわかってなかったのかな……)

会いたい人とようやく会えたのに、腕を掴む彼をどこまでも遠く感じた。

「……店に入ろう。話したい。君と」

話なんてない。

そう思うのに、冷静に『話したくない』と主張できるほど心の整理もつかなければ、これ以上周囲の視線に晒され続けるのも限界だった。

花純を馬鹿にした御曹司とは思えない彼の態度にも、どんどん気持ちが追い込まれていく。

(ここにいたくない……)

花純の心を見透かしたように、大きな手が軽く腕を引いた。

「話を聞いてくれ」

腕を掴む彼の手は、いつの間にか雛鳥を包むような緩やかな拘束に変わっている。振り切って逃げることもできるのに、それができないのはどうしてだろう。

「……頼む」

話を聞かない御曹司の願いなど、聞き届けてやる必要はない。

けれど、彼の声があまりにも優しく、逆らうことなどできなかつた。

花純は今はじめて、reach731の声を聞いた気がした。



歩道を渡って、チェーン店のカフェに入った。

注文も支払いもしてくれたのは彼だけれど、ボソボソとお札の言葉を返すのがやつとだ。コミュニケーションを図ろうとしている彼の気持ちに応えられるほどの余裕はまだない。

カップに入ったカフェオレを受け取って、八割ほどが埋まった店内の、隅の小さなテーブル席につく。

通路側に座った彼が、荷物入れのカゴを花純のほうに滑らせた。

「……どうも」

花純はバッグをカゴに置き、話すことを避けるように俯いたままカップに口をつける。

付いてきてしまったけれど、これからどうしたらいいのだろう。

混乱した頭のなかを整理するように、ちびちびとカフェオレを飲んでみる。

二人のどんよりした雰囲気のせいか、それとも彼の見た目がいいせいか、チラチラと視線を感じた。

「……jiniko さん」

「……………はら」

自分でつけたハンドルネームだが、声に出して呼ばれると、なんだか貶されている気分になってくる。

「さっきは、悪かつた」

「……………」

「ホテルでのことは、忘れてくれないか。俺が悪かつた」

テーブルの上に置かれた彼のコーヒーのカップをじっと見つめたまま、顔を上げられない。目を見なくても、彼の声から後悔の念は伝わってくる。

それはわかるけれど、返事のしようがない。

お見合いの場でのことは、強烈すぎて、忘れることなどできそうにない。

「もう一度、やり直させてくれないか」

「……………」

隣の席の女子二人がコソコソと話している。洋風のBGMに紛れて「彼氏の浮気かな？」「えー、私ならイケメンだし許しちゃうー」なんて声が聞こえてくる。隣の女子たちには、『浮気された彼

女と、復縁を迫るイケメン彼氏』に見えるのだろう。全然違うのに。

「jimikoさん、頼む」

自分のなかで踏ん切りがつかない。だから、返事もできない。

こんな状態なら、帰ればいいのだ。お見合いの席では負けじと言い返して彼を残して帰ったのだから、この場でもそうしてしまえばいいのだろう。

けれども、そうするにも気持ちが悪くない。

高慢な御曹司への憤りより、もっと大切な想いを reach731 に抱いているから。

「許してほしい。頼む」

謝罪を繰り返す彼に、誠意を感じないわけではない。けれど……

——『あまりにも地味だ』

その一言が消えてくれない。

お見合いの席での彼の態度になにか理由があったとしても、その一言は、間違いなく花純自身に向けられたものだったから。

好きな人に、少しでもよく思ってもらいたくて張り切った自分が情けない。

言われたことを引きずって、謝罪も受け入れられずに、ウジウジと黙ったままの自分も、情けない。

ぎゅっと眉根を寄せた花純の向かいで、彼が対応に困り果てたような息を吐いた。顔もあげない花純を面倒に思っ、いらだっているのだろうか。

「……すぐ戻る。だから、絶対にここで待っていてくれ」

唐突に彼が立ち上がり、出口へ向かっていく。周囲の視線が彼を追う。

どこへ行くのかと花純も視線で追っていたが、彼は飲みかけのコーヒーマも、もちろん地味な jimiko も置いて、店を出て行ってしまった。

(……行っちゃった……)

絶対に待っているなんて言っていたけれど、きっと、もう戻ってこないだろう。

彼は、jimiko に愛想を尽かしたのだ。

(言い訳もせずに行っちゃったってことは、本当にわたしが気に入らなかったのかな)

「逃がした魚デカすぎ」

どん底を這うようなマイナスに振りきった思考回路から花純を現実に戻したのは、またしても隣の席の女子二人組のひそめた声だった。

彼がいる間じゅうずっとチラチラこちらを盗み見ていた彼女たちは、今は花純の態度を笑い合っている。

(まあ、そうかもね……御曹司はともかく、reachさん……はあああ……)

カフェオレを飲み終わったら、何事もなかったかのように店を出よう。

(一人で、映画観て帰るかな)

今日は、reach731と映画を観に行く予定だった。

アメコミが原作のアクション映画。

シリアスなサスペンスや激甘のラブロマンスの選択肢もあったけれど、ラブシーンがあったら反応に困ってしまいそうだったから、前評判のいい健全なアクション映画を花純から提案した。

楽しみだと言ってくれて、座席の予約も彼が買って出してくれた。ポップコーンは大きいサイズを買って分け合おうなんて話していたあのやり取りは、いったいなんだったのだろう。

願望？ 妄想？

——花純は大学二年のときに派手に失恋して以来、彼氏いない歴を更新し続けている。その結果、いよいよインターネットで知り合った相手に、自分に都合のいい夢を見ていたのだろうか？

(素敵な人だと思ってたのに……ほんと、なに期待してたんだろう)

頭を空っぽにして店内に流れるBGMを二曲ほど聞き、花純がバッグに手を伸ばそうとしたとき、店に客が飛び込んだ。慌てて飛び込んだ人物は——

「えっ——」

館入利一。息を乱した御曹司が、戻ってきた。

彼はズンズンと花純のテーブルに接近し、当然のように向かいに座る。

(どうして戻ってきたの……?)

困惑する花純をよそに、彼はジャケットの内ポケットに手をやり、映画のチケットをテーブルに置いた。

そして、カフェを出ていくときには持っていなかったピンクのショッパーを、チケットの隣に並べる。

「……はじめまして、館入利一です」

「……………え？」

「今日、jimikoさんと会えるのを楽しみにしていました。映画のチケットは発券済みです。席は、中央寄りの左側」

「え、あの……?」

「前寄りの席は首が疲れると前に言ってただろう。もし、もっと中央の席がよければ、一駅先の映画館で十六時三十五分からの上映がある。そっちへ観に行ってもいい。今ならまだ、座席の予約も間に合う」

「いや、あのっ」

「それとこれ。受け取ってください」

戸惑う花純に、彼はテーブルの上のショッパーをぐいと差し出した。

彼はなにをしているのだろう。

改めて名乗って、映画の座席の話をして。

まるで、今、初めて会ったみたい。

——もしかして、彼は、二人の出逢いを一からやり直しているつもりなのか？

銅像の前で合流したばかりの、はじめましてのjimikoとreach731を演じている？

(でも、なんで……?)

「似合うと思う」

また、彼が花純のほうへショッパを押した。

「君に、受け取ってほしい」

疑問だらけだったが、あまりにも彼が真剣な目をしているから、突っぱねることができなかった。気圧けおされて、黙ってショッパを開く。

(服……?)

ショッパの中から出てきたのは、ベビーブルーのカーディガン。丸っこい、花型のビジュロボタンが目を惹く可愛いデザインだ。

「さっきはカーディガンを持っていたのに、今は持ってないだろう。映画館は冷える。使つてほしい」

確かに、お見合い会場で会ったときは映画館の冷房や帰宅時の気温を考えて、カーディガンを羽織っていた。しかし、このワンピースには合わないから、脱いだ服と一緒にコインロッカーに放り込んできたのだ。

(それに気付いて、わざわざ買いに行ったの……?)

だけど、どうして——?

「許してもらえないか、jimikoさん」

突然のプレゼントに、初対面を装まもったやり取り。

許しを求めての行動だと理解はできるけれど、どうしてそこまでするのかわからない。

「……あの、どうして、わざわざこんなことを……? ここまでしなくても……」

「どうして……? 君が好きだからだ」

「っ——!?!」

きゃっ、と隣の席の女子二人が小さな歓声をあげていたが、言われた花純はそれどころではない。顔が熱が集まり、心臓がバクバク跳ねる。

「君が好きだから、必死になる。それ以外に理由なんてないだろう」

「なっ、なに言ってるんですか!？」

「気付いてなかったのか? 本気で?」

心底不思議そうに訊ねられて、さらに顔が熱くなっていく。

「好きでもない相手に、毎日連絡するわけがない。君への気持ちは伝わってると思ったが、足りなかったんだな……わかった」

なにか『わかった』のかわからないが、御曹司は一人納得している。

「jimikoさん、君が好きだから、会いたかった。せっかく君に会えたのに、ここで終わりにしたくない。君に誠意を伝えられるなら、なんだってやる」

「っ——……!」

「君を失いたくない。本気で君が好きなんだ」

信じられない。信じられない!

堂々と人前でそんなことを言うなんて、隣の女子二人が聞き耳を立てているのに!

(も、もう、お願いだから好きとか言わないでっ!! 恥はずかしい!!)

「jimikoさん、頼む。もう一度、君と知り合うチャンスをくれないか」

彼の真剣な表情と、嘘のないまっすぐな目。

誠実で、繊細な別の男性が、突然目の前に現れたみたいだった。

それはまさしく、花純がイメージしていた reach731 の人柄そのものだけけれど……

「で、でも、さっきはわたしをお金目当ての女扱いしてっ、それに地味だって……」

「あれは……弁明させてくれ。あのときは、見合い相手に嫌われるために、わざとあんな態度をとった」

「わざと？ わざとわたしにひどいこと言ったの？」

「本当に悪かった。理解できないかもしれないが、父から『三十までに結婚しろ』と言われてる。

見合いは強制だ。周囲も俺の結婚を——いや、館入家の息子が身を固めることを望んで、必死で相手を探して連れてくる。家名への執着や、財産のことしか頭にないような相手ばかりを」

「……それ、偏見入ってませんか？」

「偏見じゃない。本当に、そういう人間は多いんだ。映画でもいるだろう。地位や名声、金や家名にしか興味のない傲慢な人間が。ああいう人間は実在する。話なんて通じない。こちらから丁寧に断りを入れても、自分の家名や父親の役職を叫んで意見を通そうとしたり、理由を書面にしろと言われたりしたこともある。付き合っていられない」

強制のお見合いも、お金目当ての結婚も、確かに花純には理解できない世界だ。

けれど、そういう世界はそれこそ映画でいくらでも見てきた。

庶民には想像もつかない苦労が、御曹司の彼にはあるのかもしれない。

「だから嫌われるように、わざとひどい態度をとるようにしてたんだ。見合いにうんざりして、適当になっていたところもある。だから、君を見て、いつもの見合い相手とは違うと思ったのに、そういう人だと決めつけて——悪かった」

まっすぐに花純の目を見たまま謝罪する彼の事情と、反省の気持ちはよく伝わってきた。

でも、どんな理由があっても人を傷付けるようなことを言っていたとは思わない。はじめからこうして話せていたら、花純だってあんな思いをせずに済んだのに。

「悪かった。一方的にひどいことを言ってしまった。本当に、悪かった」

本当にひどい態度だった。傷付いた。

そんな人が reach731 だと知ってショックだった。

だけど、こうして話しているうちに……傲慢な御曹司でしかなかった館入利一が、少しずつ SNS でやりとりしていた reach731 に重なっていく。

「君が着替えたのは、俺のせいだろうか？ 待ち合わせ場所で君を見たとき、後悔した。おろしたての服は、見合いのためじゃなくて、俺のためだったのに」

「べ、別にそういうわけじゃないですけど……!」

「隠さなくていい。会えるのを楽しみにしてたのは、君だけじゃない。いや、俺のほうがずっと」
テーブルの上の花純の手に、彼の手が重なる。

「会いたかった、jimiko やち」

「っ……………」

ドキッと胸が高鳴って、顔に熱が集中する。慌てて手を引つ込めたけれど、手の甲に感じた彼の熱は簡単には消えてくれない。

錆びついていた乙女心が、音をたてて動きだしたのを感じた。

「君に会いたかった。ずっと前から、会いたかった。それに、君は地味なんかじゃない。君は可愛い」

目を見て『君は可愛い』なんて言われたものだから、花純の顔はさらに熱くなる。

「見合いのときの俺は忘れてくれ。本当の俺は、君が知ってる reach731 のほうだ。信じてもらえるまで何回でも言う。君と会いたかった。君は可愛い。君が好きだ」

「ちょ、ちょっとそれやめて……………」

「頼む、帰るなんて言わないでくれ。俺は、本気で jimiko さんと——」

「わ、わかりましたからっ！」

花純は顔を片手で隠した。

(無理無理無理……………！ なんでこの人、こんな場所で好きとか可愛いとか言えるの!?)

これ以上、彼の口から思わせぶりの言葉が飛びだしたら、どうにかなってしまうそうだ。

お世辞。わかってるのに、受け流せずに喜んでる馬鹿な自分が恥ずかしい。胸にクる。ダイレクトに。ガクガク心を揺さぶられる。

だけど、それよりも——

館入商事の次男坊。イケメンで長身で、望んだものはなんだって手に入るような男の人だ。

お見合いの席で会った彼は、まさにそんな傲慢御曹司だった。

そんな彼の別の一面。それが reach731。

映画の時間を調べて、チケットを予約して。人の多い駅ビル前で、待ち合わせの相手を探して銅像の周りをぐるぐる回ったりなんかして。自分の非を認めて、頭をさげて。

大企業の御曹司で、プライドだって見上げるほど高いだろうに、いい歳した男の人が、レディーヌの、こんなに可愛いカーディガンまで買ってきた。

それは全部、 jimiko のため——

花純が、 reach731 に会う日を楽しみにしていたように、彼も。

好きと可愛いとは別としても、会いたかったの言葉には、きつと嘘はない。

彼の行動が、それを証明している。

憎みきれない。

彼と—— reach731 と重ねてきた日々を思えば、余計に。

「jimiko やん——」

「そ、その jimiko っていつの、やめてください。いや、わたしが自分でつけたんですけど、声に出されると、ちょっとキツいってどうか……………」

「ああ……………、悪かった。じゃあ、花純さん」

そっちなのか！

瀬村さん、と呼ばれることを予想していた花純の顔からは、いっこうに熱がひいてくれない。下の名前で呼ぶのは両親と姉だけだ。異性からの『花純さん』呼びは、異常なほど胸に響く。

「花純さん、俺と一緒にいてほしい」

「も、もう、わかりましたからっ。コーヒー飲んで、映画、行きましょ……！」

照れ隠しにコーヒーを飲むふりをしながらちらりと見ると、向かいの席で、今日のはじめて御曹司の口元にやわらかな笑みが浮かんだ。ホツとしたような、嬉しそうな、満たされた笑顔。

(っ……………！)

隣の女子二人が「きゃ〜」と抑えた声で騒いでいたけれど、彼の笑顔を正面から見た破壊力は、声も出ないほどだった。



(さすがにもう、先に帰っちゃったかな……)

彼と一緒に映画を観終えた花純は、映画館の化粧室の出入り口で周囲を窺っていた。

混雑のピークを過ぎた化粧室から、そろりと通路に出る。

不覚にも、アクシヨン映画で泣いてしまった。それも号泣。感動した。

ボロボロに化粧崩れした顔を見られたくなくて、エンドロールが終わってすぐに『お手洗いに！』と化粧室に逃げ込んだ。

さすがに週末の、それも人気作の上映後とあって、鏡の前をキープするにはそれなりの時間を要した。そこから、滲んだアイメイクやら剥げたファンデーションやらの手直しをはじめただから、できる限り急いだとはいえ、彼が待ちくたびれて帰っていたとしても責める気にはなれない。reach731なら待つていてくれるのではという期待と、御曹司の館入りなら帰っているだろうというちよつと冷めた確信の間で揺れながら、花純はきよるきよると周囲を見回した。

まだ通路は混雑している。彼の姿は見当たらない。

(帰ったのかな……)

「花純さん」

背後から声をかけられて、思わずビクツと飛びあがってしまった。

振り返ると、花純の反応に少し笑った彼がいる。

待つていてくれた——トクトクツと、鼓動が喜んだみたいに駆け足になる。

花純は勢いよく頭をさげた。

「お待たせして、すみませんっ」

「謝らなくていい。はい、これ」

彼が差し出したのは、封筒に似た厚みのない平袋だ。映画館のロゴが大きく入っている。

「わたしにですか？」

「そう、君に」

受け取って中身を出してみると、今観た映画のポストカードが入っていた。

思わず「あっ」と声をあげてしまう。

「コレクションに必要だろう？」

お気に入りの映画は、必ずポストカードを買って帰るようにしていた。チケットの半券と一緒にコレクションしているのだと、reach731に話したのはいつのことだっただろう。

(覚えててくれたんだ……)

ジーンと胸が熱くなる。他愛ない会話を、彼は覚えていてくれた。

「わあ……、ありがとうございます！ 買おうかなって思ってたんです」

「そうだと思った。泣くほど感動してたから」

「っ！ それは、言わないでくださいっ……！」

「あれだけ人がいたのに、泣いてるのは君だけだった」

「わかっています！ だから言わないでほしいんですっ！」

アメコミ原作のアクションムービーで号泣する人間は多くない。実際、超満員の映画館でスンスン泣いていたのは花純くらいだ。

だから余計に恥はずかしいのに、敢あえてそこを指摘してくるなんて……！

花純の頬が熱を持ちはじめると、彼はなぜか満足したように目を細めた。

(……意地悪御曹司の顔！)

もう一度お礼を言いながら、バッグから手帳を取り出す。カバールのしっかりと大きめの手帳を開いて、しっかりとポストカードを挟み込む。手帳をバッグにしまうと、彼が腕時計を確認してい

た。そういえば今、何時だろう？

時刻は午後六時四十分。

映画を観たあとの予定は決めていなかったけれど、これがデートなら、解散にはまだ少し早い。あくまで、デートなら。

(っ……………!!)

カフェでの会話が蘇よみがえって顔が熱くなる。彼が、『好き』だの『可愛い』だのと、思わせぶりなことを言うからだ。過剰に意識してしまう。

「花純さん、食事に行かないか？」

「——食事、ですか？」

「この近くのイタリアン。居酒屋みたいにごちゃごちゃしてる、小さな店だ。でも味はいい」

食事といわれて、分不相応ぶんふそうおうな高級店か、怪しいバーに連れていかれたらどうしようと思構かまえてしまった。だけど、小さなイタリアンなら。

肩肘張かたじらずに、楽しい時間を過ごせるかもしれない。

それに、お見合いで出逢ってからカフェまでずっと言ひ争あってばかりで、共通の趣味の話はなにもできていない。

これでは、お互いの素性を明かして映画を観ただけになってしまう。

reach731 へ、もう少し話してみたい。

今の映画、reach731はどう感じた？ 出演していた俳優の過去作のお気に入り？ 予告編で

気になった映画はどれ？

彼となら、いくらだって話せる気がする。

「せっかく君に会えたのに、ろくに話せてない。それに、君が今の映画のどこでそんなに感動したのか、ぜひ詳しく知りたい」

「あれはっ、感動のシーンだったじゃないですかっ」

肩を怒らせて言うと、彼はまた少し笑った。

「そうだな。確かに、いい演出だった。行かないか、花純さん。必要なら、俺と一緒に親御さんに連絡しよう」

「そ、それは結構ですからっ」

そんなことをしたら、まるでお見合いで知り合って意気投合したみたいに思われるじゃないか！ だけど、彼が同じように思ってくれていたことが嬉しくて、あっさりと頷いてしまった。

館入利一と過ごすのではなく、reach731へ食事に行く。

映画を観て、そのまま食事に行くだけ。

それってやっぱり、デートなんだろうか。彼は、どういふつもりだろう。

オフ会？ デート？

だけど訊いたら、また花純を勘違いさせるようなことを平気で言いそうだから、そこは曖昧なままにしておこうと、そっと心に決めたのだった。



駅ビル裏の、小さなイタリアンバル。

店内はかなり賑わっていたが、花純たちが到着したとき、ちょうどお客が入れ替わるタイミングだったようで、待つことなくカウンターの並びの席につけた。

人気の窯焼きピザをはじめとする料理と、お手頃で美味しいワインは花純の心を鷲掴みにする。

ド庶民にとっては、値段のわからない店に入るのは恐怖でしかない。こういった店を選んでくれて、安心していた。

こぢんまりした店内は、陽気な音楽と人の声が混ざり合って、楽しい空気が満ちている。

はじめは肘が触れ合いそうな距離で座ることに緊張していたけれど、彼が濃厚な映画話にどこまでも付き合ってくれるので、気付けば花純は夢中になって話していた。

「そうなんです！ あの映画のいいところは、他にはない切なさ！ 特に最後の、二人がすれ違っシーン！」

「二人が結ばれたのかどうか、取っかけて描いていない」

「そう、そうなんです！！ 結ばれてほしいけど、ヒロインの性格を考えると……！！」

「難しいだろうな……でも、だからこそ、二人は認め合えたんだろう」

「ああ、本当にそのとおりっ！ 利一さん、やっぱりわかってくれてる！！ ほんとに、眼球が溶けちゃうんじゃないかってくらい泣ける傑作ですよね！」

お店についてからの会話があまりにも盛り上がり、花純は自然と彼のことを『利一さん』と呼ぶようになっていた。

「泣かせすぎると、君の眼球は溶けるのか。映画に誘うときには、気を付けないといけないな」
利一が笑ってグラスに口をつける。

また映画に誘うつもりだと言われたみたいで、ちょっとドキッとする。

なにを期待してるんだか、と自分を叱りつけながら、花純もグラスのワインを流し込んだ。

「君は、年に何本くらい観てるんだ？」

「んー数えたことないですけど、週に二、三本は絶対映画館で観てます。それ以外は、レンタルで」
「きっかけは？」

「映画を観はじめたきっかけですか？」

利一は頷きながら、グラスにワインを注ぐ。「飲むか？」と訊かれて、花純は一瞬迷ったけれど、結局グラスを差し出した。

注がれたワインをグイッと半分ほど飲んで、深い息を吐きだす。

——映画にのめり込んだきっかけ。

花純にとっては、お酒の力で心を麻痺させておかなければ、なかなか話せない内容だった。

「大学二年のとき、すつごく派手に失恋したんです——」

——大学二年の初夏だった。

二つ年上の先輩、小金沢隆司（こがねざわたかし）から告白された花純は、はじめての彼氏に舞い上がっていた。

付き合いはじめて三日目にキスされたとき、ちよつと手が早いな、と思った。

十日目で家に誘われたとき、正直ためらった。だけど、お泊まりを渋って嫌われたくなくて、結局彼の家に泊まった。

ところがその四日後には、彼は花純の親友と付き合いはじめていた。

別れ話どころか、花純には連絡もなしにだ。

頭が真っ白になった。

処女を捧げて四日で捨てられたなんて、信じられなかった。

彼には電話にも出てもらえず、『どういうこと？』と親友を問いたでした。

すると彼女は、勝ち誇った顔で『たあくん、花純じゃ満足できないんだって』と嘲笑った。

彼は、話したのだ——初めての夜の、花純の失態を。

性急なキスとおざなりな愛撫に、体はこれっぽっちも彼を受け入れなかった。濡れないままに迎えた初体験の痛みは想像以上で、花純は泣きながら何度も『痛い』と訴えた。

結局、彼は途中で萎えてしまった。

彼の不満げな態度と投げやりな舌打ちに、花純は自分を責めた。

彼を満足させてあげられなかったのは、自分のせいなんだ。痛みくらい、我慢すればよかった。

恋人を失望させた。自分は、人並み程度のこともできないダメな人間なんだ——自責の念にとらわれて、『次は頑張る』と言った花純に、彼は『もういい』と背を向けて眠った。

彼の隣で、泣いて朝を迎えた。

絶対、誰にも知られたくなかった。

それなのに、彼はよりによって花純の親友にそれを話し、彼女は彼女で、親友だったはずの花純に同情するどころか彼を選んだ。

なにかいけなかったのか、花純は自分の行動のすべてを後悔して過ごした。ベッドで泣いたせいで捨てられたのか、容姿も性格も地味なところがいけなかったのか、どれだけ思い悩もうと、明確な答えはわからない。

彼氏と友達と純潔をいっぺんに失って、自分だけが暗闇に突き落とされたような気がした。思い出すたびに、胸の奥がギューツと苦しくなる。

グラスに残っていたワインを、乱暴に胃袋へ流し込む。

こんな話、とても利一には聞かせられない。

あの頃の自分は、本当に馬鹿だった。

付き合いたての彼氏の顔色を窺うことに必死で、自分を大切にしなかった。

それでなくても、処女がどうのこうのなんて具体的な内容は話せないけれど。

「派手に失恋して、結構へこんじゃって。それで、大学二年の夏休みは、引きこもるって決めたんです。だけど、いくら寝ても気持ちには楽にならなくて。そんなときに、夜中にたまたまテレビをつけたら、映画を放送してたんです。利一さん、知ってるかなあ。『いきなりクレイジーサンタ』って映画なんですけど」

「……あの、サンタの恰好をした、三人組の中年男が主人公の？」

「そう、それ！ 奥さんに浮気されて離婚した三人のオジサンが、クリスマスの日にサンタのコスプレで元妻に復讐するって映画。もう、大笑いですよ！ わたしの言いたいこと、全部代弁してくれてるみたいで！」

キレたオヤジたちが『あんなに俺の××で××したくせに！』と口汚く元妻を罵り、浮気相手を前にして『この××××野郎が！』と叫ぶシーンで、花純は涙を流して大笑いした。

現実世界の辛さなどどうでもよくなるほどおバカで痛快なコメディが、花純の濁った心をすすいでくれたみたいだった。

花純がその話をすると、利一の表情が少し険しくなる。

きつと、映画の内容から、花純の言う失恋が相手の浮気によるものだったと気付いたのだろう。だけど、彼はわざわざ花純が語らなかった部分を突っ込んで聞いてくるようなことはしない。

繊細で大人な、reach731の優し〜さん。

心の傷跡に触れることなく、痛みに共感してくれたみたいで、温かい目が花純に向けられていた。「それがきっかけだったのか」

「はい。現実逃避って言ったらそうなんですけど、いろんな物語を追えるのが、とにかく楽しくて。残りの大学時代は、ズーッと家とレンタルショップの往復でした。就職してからは、まとまったお金が入るぶん余計に熱くなっちゃって。映画館に通いだして、ついには感想を書くためにSNSのアカウントまで作っちゃって」

あはは、と笑って利一に顔を向けると、彼は目を逸らすことなくじっと花純を見つめていた。

ドキッとさせる、熱っぽい視線に動けなくなる。

「それで君は、jimikoさんになったのか」

jimikoを呼ぶ彼の声は、どこまでも優しい。

——画面越しのreach731も、ずっと、こんなふうに優しく呼びかけてくれていた？

他愛ない映画話も、くだらない天気の話も、ぼんやりとした仕事の愚痴も、全部こんなふうに、優しく聞いてくれていた？

胸がどんどん高鳴っていく。

自分は、この人に会いたかったのだと痛感させられる。恋をした相手が、目の前にいるのだと自覚するほど、脈は加速していくばかりだ。

どうしよう。恋してしまう。画面を越えて、館入利一人に。

「花純さん」

jimikoを呼ぶ声と同じ響きで、花純を呼ぶ。

はい、なんて返事をしている場合じゃない。

現実世界で恋をはじめると、自分にはまだ早すぎるのに——

「俺は、浮気はしない」

「……………え？」

「花純さんだけだ」

「っ——!？」

心臓が、パンツと弾けた。

この人は、なにを言いだした!?

「だから花純さん、俺と」

「いや、あのっ」

「結婚を前提に」

「いや、ちがつ、だからあのっ!」

全身から汗がふきだす。

彼の唇がふたたび開く。絶対にその先を、言わせてはいけない。

まだなんの心の準備もできていない——!

「り、りいちきっ」

——花純の声と、ガシャン、という派手な音が重なった。

左足がじつとりと濡れる。咄嗟には反応できなかった。

カウンターの上で転がるワイングラス。テーブルから流れ落ちる赤い液体が、花純の白いワンピースを汚していく。

「ああっ、すみませんっ!」

隣に立っていた女の人が謝罪の声をあげたのと、カウンター越しに店員がタオルを差し出してくれたのは、ほとんど同時だった。

「大丈夫か」

利一がタオルを受け取ってワンピースを押さえたと思ったら、背後から店員の手が伸びてきてテーブルに広がったワインが手際よく拭き取られていく。

「お怪我はありませんか？」

「本当にすみません！ 立ったときに、バッグがグラスに当たっちゃったみたいで……！」

利一にワンピースを拭かれながら、店員と女の人に同時に話しかけられて、花純は対処する優先順位を決められない。まだ頭が混乱している。

ワインをこぼした彼女は、今にも泣きそうな顔をしていた。

「本当にごめんなさい……！」

「大丈夫ですよ。ちよつとかかっただけですし」

「すみません、本当にごめんなさい……ワンピース、白なのに……」

「本当に、気にしないでください。大丈夫なので！」

花純が笑いながら身振りで『行ってください』と示すと、彼女は申し訳なさそうに眉を下げたまま、彼氏とおぼしき男の人に連れられて店を出た。

そのときにはすっかりカウンターが片付いたあとで、店内は何事もなかったように騒々しさを取り戻した。

「大丈夫か？」

「はい、平気です。拭いていただいて、ありがとうございます」

ワンピースは手早く利一が拭いてくれたけれど、ワインのかかった部分は、ほんのり赤く染まっ

ている。今日買ったばかりの白のワンピース、さつそくシミができてしまうなんて。

(あーああ……)

湿ったワンピースを指先で摘まむ。シミができた部分はスカートのあたり。

だけど、これくらいの範囲なら洗面所で水洗いできそうだ。水洗いしておいて、帰ってすぐに漂白したらシミは残らないかもしれない。

「ちよつと、お手洗いに。水で洗ってきますね」

花純は、混雑した店内の奥にあるトイレに入った。

ドアを開いて右手側に手洗い場があり、その奥に一つだけ個室が作られた小さなトイレだ。

ちよつと空いていてよかった。

花純はワンピースの裾を持ち上げて、シミになった部分を水洗いした。

濡れると色が変わって、汚れが落ちているのかどうかわからない。無駄にスカートを濡らしただけな気がする。

せっかく買ったワンピース。

もう着られないかもしれないと思うと、なんだか急に悲しくなってくる。

それに、なんだか足もベタベタする。スカートから滴り落ちたワインが足を汚したのかもしれない。ペーパータオルを濡らして拭こうと考えたが、トイレにはハンドドライヤーが設置されていて、ペーパータオルはない。代用できそうなものはトイレットペーパーだけ。

水で濡らしたトイレットペーパーで、足を拭く？

ボロボロになったトイレトペーパーがストッキングにまとわりつく、悲惨な未来しか見えなかった。

「はあああ……」

大きめのため息がこぼれだした。ツイてない。

でも、助かったとも言える。利一はさつき、重要なことを話そうとしていた。花純の心が、まだ受け入れる準備のできていないことを。

(けっこんを、ぜんてい……)

顔からポツと火が出そうだった。

(初デートでそんなこと!! OKできるわけないでしょ!! もっと段階踏んでよ!!)

今自分でデートと認めてしまったことにも、段階を踏んだらOKするのかわからないという疑問が浮かんだことにも、腹立たしいやら恥ずかしいやらで忙しい。

気持ちをぶつけるように濡れたワンピースを絞っていると、コンコン、とノックの音がした。

「はい、ちょっと待ってくださいね」

「花純さん」

「利一さん？」

返事をする、利一は当然のようにトイレの中に入ってきた。

別に用を足してはいるわけではないからいいのだけれど、狭い洗面所だ。大人二人が向かいあって立つと密着度が高い。

逃げるように、花純は洗面台にじりじりと寄っていった。

「シミは落ちたか？」

「……洗ったんですけど、落ちたかどうかわからなくて」

その場で利一がしゃがみ込み、濡れたワンピースのスカートをじつと見つめる。

そんなにまじまじと見なくても……それに、どうして彼は追いかけてきたんだろう。

まさか、さっきの話の続きをしにきた……？

「シミ抜きに出せば落ちるだろう。ひとまずタオルを借りてきた」

そっちな！

「あつ、よかったあ！ タオル、ありがとうございます。ここ、ハンドドライ——り、利一さん!？」

まるで跪くようにしゃがみ込んだまま、利一は手に持ったタオルで花純のワンピースを拭きはじめた。濡れた部分をタオルで挟み込むようにして、軽く押さえていく。

カアツと顔が熱くなる。こんな状況は、恥ずかしい以外にない。

「利一さん……!？」

慌てて彼を止めようと手を出した。

けれど、タオルを持つ利一の手が予想以上に男らしくて、触れることをためらってしまう。

骨ばった、大きな手。長い指。女性のそれとはまったく違う。

「随分、豪快に洗ったな。びしょ濡れだ」

「……………」

高い鼻。思ったより睫毛が長い。

男の人を見下ろすことなんて普段ない。見慣れないアングルのせいか、見てはいけないものを見てしまった気になってくる。

チラ、と上目遣いに利一が花純を見上げた。その優しい目にも、胸がザワザワする。隣り合ってお酒を飲んでいたときより彼を色っぽく感じるのは、なぜだろう。

「このワンピース、今日買ったばかりだろう？」

「……………そう、です」

弱々しい声が、狭いトイレのなかで反響する。

ドア一枚が、店内の陽気なBGMも、騒がしい声も、人の気配も遠ざけている。

二人きりを強く意識してしまうと、また脈がジワリと速くなった。

「さすがの君も怒るかと思った。ワインをこぼされたとき」

「……………あの女の人に、ですか？」

「そうだ。おろしたての白のワンピースに、赤のワインをこぼされたら怒っていい」

「……………でも、わざとじゃないし、すごく申し訳なさそうな顔、してたから」

「本当に優しいんだな」

すうっと、利一の表情がやわらかくなる。

心臓を鷲掴みにされたみたいに、息が止まった。慌てて目を逸らしたけれど、ドキドキはおさま

らない。

どうして、彼に「あとは自分でできる」と言えないんだろう。世話を焼かれて喜ぶ趣味はないのに。それなのに、彼がここまでしてくれていることが、少し、嬉しいと思ってしまうなんて…………

(どうしちゃったんだろう…………)

「他には？ 洗ったのはここだけか？」

「はい、洗ったのはそこだけで……………あの、利一さん、そのタオル貸してください」

「どうした？」

「足にもワインがかかったみたいで。左足だけ、すごいベタベタしちゃって」

ああ、と納得したように彼が立ちあがった。

タオルを受け取ろうと差し出した花純の手を無視して、彼は水道のレバーを湯の側に傾けると、タオルの端を熱い湯で濡らした。

さすがに焦りがでてくる。彼がこれからは何をやる気か、想像しただけで耳まで熱を帯びていく。

「利一さんっ！」

「洗面台に座るといい」

「ちがつ、そうじゃなくて、自分でできますからっ！」

「君は、放っておいたら水浴びして出てきそうさ。座って」

利一はまた花純の前にしゃがみ込んだ。

「このあたりか？」

立ち読みサンプル
はここまで

大きな手が、左のふくらはぎに触れた。電気が走ったみたいに、体がビクッと震える。彼の手が、壊れものに触れるように、そうっとストッキング越しの肌を辿っていく。ワインのべたつきを探す手に、熱を煽られていた。

「り、利一さん……！ 自分でできるからっ……！」

花純の泣きそうな声に、利一はチラと視線をあげた。けれど、その目はすぐに足に向けられ、温かなタオルを足に押し当てる。

反対の手が固定するようにそっとふくらはぎに添えられて、ズクンとお腹の奥が疼いた。

「っ……………」

ストッキングの上をタオルが辿っているだけなのに、パンプスの中で足の指をぎゅっと丸めてしまふ。

自分とは異なる熱が肌を湿らせていくのは、まるで、ゆっくりと足を愛撫されるみたいで……

(こんなの……)

熱くなった顔を隠すように、横を向くのが精一杯。声も出せない。

胸が高鳴って、体の芯が火照るのは、自分が感じているからだ。それがどうしようもなく恥ずかしい。足を拭かれているだけで、こんな気分になるなんて。

酔っているせい？ 男に飢えてる？ それとも、彼が好きだから——？

膝から下を拭いていたタオルが、膝のすぐ上あたりへと這いあがってくる。膝丈のスカートの内側へ忍び込んだ手が、ワインのべたつきを探していた。

「っ……………」

「ここは？」

彼の指に腿をくすぐられ、勢いよく頭を振る。ゾクゾクする。

これ以上触れられたら、どうにかなってしまいたい——

(そんなの、ダメ……………！)

利一が立ち上がり、花純はホッと息をついた。

よかった。終わった。彼の手のなかに落ちずに済んだ。そう思った途端に、なにもかもから解放されたみたいに気が緩んで、すーっと体から力が抜けていった……………

3

マシュマロの上で寝てるみたいだ。

全身を優しく包み込んでくれる、やわらかいシートが気持ちいい。

眩しい明かりに目を瞬かせながら、視線を巡らせる。

濃紺のカーテン、白一色の壁紙、シックな二人用のテーブルセット、広い部屋には家具がほとんどない。生活感がまったくないので、おそろくどこかのホテルだろう。

だけど、どうしてホテルに？